

植生史研究関連文献リスト 1986年

- Crawford, G.W. Sakushu-Kotoni-river plant remains. 「北海道における初期農耕関連資料—サクシュコトニ川遺跡出土の植物種子—」, 4-21. 北海道大学文学部基礎文化論講座人類学研究室。
- 炭化物マウンドから出土した約234000個の種子のうちの約半分の検討結果。同定された32種のうち10種は栽培植物。
- 遠藤秀典・鈴木祐一郎。妻及び高鍋地域の地質。地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）。105 pp. 地質調査所。
- 中期更新世小丸川層と通山浜層の花粉化石群集の記載あり（第67図）。分析はパリオ・サーヴェイ株式会社による。
- 遠藤邦彦・小杉正人。完新世における環境変遷。「古河市史資料原始・古代編」, 1-18. 茨城県古河市。
- Fuji, N. Palynological study of 200-meter core samples from Lake Biwa central Japan II: The palaeovegetational and palaeoclimatic changes during the ca. 250,000-100,000 years B.P. Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N.S., No. 144: 490-515.
- 琵琶湖底200 m ボーリング・サンプル（約25万～10万年前）の花粉分析による古気候変遷の解析。
- Fuji, N. Global correlation on the palaeoclimatic changes between Lake Biwa sedimentary evidence and other marine and terrestrial records. Proceedings of the Japan Academy, Vol. 62, Ser. B: 1-4.
- 琵琶湖の200 m と1400 m コア上部の花粉分析にもとづく古気候変動曲線を海洋底で得られた酸素安定同位体比にもとづく曲線、その他の環境変動曲線と比較検討した。
- Fuji, N. Correlation between palaeoclimatic changes from Lake Biwa, Japan and Bogota, Colombia in South America and palaeotemperature change from equatorial Pacific. Proceedings of the Japan Academy, Vol. 62, Ser. B: 381-384.
- 琵琶湖での古気候変動とボゴタの古植生・気候変動、深海底コアからの古気温変動との対比論。
- Fuji, N. The importance of stratigraphic investigations on ancient Lake Biwa. Bulletin of the Faculty of Education, Kanazawa University, Natural Sciences, No. 35: 45-55.
- グローバルな気候変動を理解する上での古琵琶湖研究の重要性を説く。
- Fuji, N. Researches in the Far East on the study of the Holocene during the inter-congress time, 1983-1987 (I). Bulletin of the Faculty of Education, Kanazawa University, Natural Sciences, No. 36: 7-20.
- 日本における完新世の植生と気候の変遷の総括。ただし対象とした資料にかなりの偏りがある。
- Fuji, N. Researches in the Far East on the study of the Holocene during the inter-congress time, 1983-1987 (II). Bulletin of the Faculty of Education, Kanazawa University, Natural Sciences, No. 36: 21-34.
- 富山湾入善海底林の研究の紹介。
- 藤 則雄。寺家遺跡の古環境。「寺家遺跡発掘調査報告 I」, 40-55. 石川県埋蔵文化財センター。
- 分析結果の1次データではなく、周辺の花粉分析結果を紹介し、遺跡周辺（能登半島基部）の縄文時代以降の環境変遷を考えている。

- 藤 則雄。花粉学と考古学。「日本考古学論集1」, 304-322。吉川弘文館。東京。
「考古学と自然科学」第2号に掲載の同題目による論説の転載。
- 藤 則雄。植物遺体。「真脇遺跡(本編)」, 407-424。石川県能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団。
主に縄文時代前期～晩期の分析。自身による花粉分析結果、大型植物遺体分析結果の他に、嶋倉、鈴木、依田らによる木材遺体の分析結果、邑本による珪藻分析結果も紹介している。
- 藤 則雄。環境。「真脇遺跡(本編)」, 425-433。石川県能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団。
植物遺体について総括し、遺跡周辺の植生変遷、古気候変遷、古地理変遷について議論している。
- 藤 則雄・多賀みより。富山湾入善海底林の花粉学的研究。金沢大学教育学部紀要、自然科学編, No. 35: 75-94。
海底林から得られた28試料の花粉分析結果を記載。ハンノキ属・ヤナギ属が優占。
- 藤井昭二。埋没林と海水準変動。季刊考古学, No. 15: 21-24。
富山湾周辺の埋没林を紹介し、その成因を海水準変動に求めた。
- Fujii, S., Nasu, N., Smith, A.J., Fuji, N., Mizutani, Y., Shimoda, T., Boggs Jr., S., Fujioka, K., Mappa, H., Kawahata, H., Kong, Y.S. & Tanaka, T. Submerged forest off Nyuzen, Kurobegawa alluvial fan, Toyama Bay, central Japan. *Boreas*, 15: 265-277。
海面下20-40 mの10000-8000年前の沈水林の記載と当時の環境を復原。材はハンノキ属・ヤナギ属を主とするもので、潟湖沿岸域であった可能性が示された。
- 藤下典之。玉越遺跡から出土したウリ科植物の種子について。「玉越遺跡, 一般国道1号袋井バイパス埋蔵文化財報告書」, 157-160。建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・袋井市教育委員会。
弥生時代後期後半のメロン仲間、弥生時代後期後半および古墳時代後期のヒョウタン仲間。
- 藤下典之。新保遺跡より出土したウリ科植物の遺体。「新保遺跡I, 弥生・古墳時代大溝編。関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集」, 62-70, pls. 1~2。群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団。
弥生時代、古墳時代のメロン仲間、ヒョウタン仲間、トウガンの産出。
- 藤原宏志。脇浜遺跡におけるプラントオパール分析。「(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第6輯都市計画道路貝塚中央線建設に伴う脇浜遺跡一発掘調査報告書」, 113-115。財団法人大阪府埋蔵文化財協会。
大阪湾沿岸海浜部の遺跡での縄文時代晩期から中世(15世紀)の堆積物のプラントオパール分析。
- 福間敏夫・藤田和夫。福知山盆地の中部更新統。第四紀研究, 24(4): 263-281。
福知山累層産大型植物遺体群のリストと花粉分析結果を含む。下部層から温暖気候を示すアオカズラ、ハマナツメ属、チシャノキなど暖温帯種を含む遺体群集が記録されている。
- 畑中健一。守恒遺跡(北九州市)の花粉分析。「守恒遺跡一国道322号線築造工事に伴う発掘調査, 北九州市埋蔵文化財調査報告書第50集」, 89-92。北九州市教育文化事業団。
弥生中期以降の花粉化石群集を記載。
- 畑中健一。下貫遺跡(北九州市)の花粉分析。「下貫遺跡一北九州市小倉南区大字貫(下貫)3200番外所在, 北九州市埋蔵文化財調査報告書第53集」, 33-36。北九州市教育文化事業団。
縄文後・晩期以降の花粉化石群集を記載。

土方純子。大阪府北部・能勢地域における第四紀堆積物の花粉分析。大阪市立自然史博物館研究報告, No. 40: 15-20.

段丘の露頭から採取された粘土層の花分析。マツ属・トウヒ属が優勢であるが、下層でコウヤマキ・スギを、上層ではハンノキ属をとまなう。

星野フサ・伊藤浩司・矢野牧夫。石狩低地帯における最終氷期前半期の古環境。北海道開拓記念館研究年報, No. 14: 13-30.

4花粉帯を設定し、最終氷期前半期の寒冷期とそれに続く温暖期を認めた。

市河三次。考古学のための花粉分析・微細遺物情報量とその分析の基礎的問題。山梨県立女子短期大学紀要, 19: 45-60.

花粉分析の基礎的問題、京都桂川の水中心花粉の季節動態、遺構の微細な炭化物の調査の意義などについて議論。

五十嵐八枝子。北海道の完新世におけるコナラ属の分布。北方林業, 38: 266-270.

約8000年前コナラ属が急速に拡大したことを示し、その要因と急増直前の森林について考察。

五十嵐八枝子。泥炭地の生成とその変遷。地学教育と科学運動, 15: 166-172.

北海道の泥炭地を大きく沖積平野の泥炭地(サロベツ・釧路・石狩)と高地湿原とにわけ、それぞれの生成過程を議論。石狩泥炭地の生成と変遷については花粉組成図を示してまとめている。

池田 碩・竹村忠二・百原 新。奈良盆地北部丘陵の地形と地質。奈良大学紀要, 15: 74-104.

奈良大学建設予定地の地質調査。大阪層群のMa1, ピンク火山灰より上位(約90~100万年前)の層位から産出する大型植物遺体を記載。

伊木力遺跡調査会。西北九州の縄文時代低湿地遺跡—長崎県伊木力遺跡。季刊考古学, No. 14: 81-82, 85-86.

最古のチャンチンモドキ、モモの出土、センダンの丸木舟出土、その他の種実類出土を含む。

岩内明子・長谷義隆。中・北部九州後期新生代の植生と古環境—その2 安心院—院内地域(上部鮮新統)—。地質学雑誌, 92(8): 591-598.

津房川層の花分析・大型植物化石と岩相の検討から植生の変化と気候の変化・地形の変化について議論している。

岩内明子・長谷義隆。大分県阿蘇野層(中期更新世)の珪藻化石群集。第四紀研究, 24(4): 283-293.

花粉化石の分析結果(長谷・岩内, 1985)との比較から湖水域の環境変動と当時の気候変動が関連していることを示唆。

叶内敦子。南関東第四紀後期の古植生。「相模原の地形・地質—調査報告書(第3報)」, 50-56. 相模原市地形・地質調査会。

山梨県上野原町の約7万年前の阿蘇4火山灰を挟在する泥炭層の花分析結果を含む。マツ属・トウヒ属優占、ツガ属・モミ属付随の組成だが、温帯性の針葉樹林が想定された。

笠原安夫。栽培植物の伝播。季刊考古学, No. 15: 48-52.

縄文時代の栽培植物の出土状況の紹介。とくに、エゴマとシソ・アサ・ゴボウ・アブラナ類については形態・原産地もふくめて議論している。

笠原安夫・藤沢 浅。米子市目久美遺跡出土の土器片の植物同定。「加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, 96-97, 図版77~78, 米子市教育委員会。

縄文時代前期, 中期, 弥生時代中期の土器片に付着した炭化ニフトコ種子。

笠原安夫・藤沢 浅。上の平遺跡住居址から出土した炭化種子の同定。研究紀要(山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター発行), 3: 69-77, 図版1~10。

弥生時代からのエゴマ?, 縄文時代中期からのスベリヒユ, エゴマ?, エノキグサ, ニフトコなどの産出。

笠原安夫・武田満子・藤沢 浅。米子市目久美遺跡の種実の分析・同定。「加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, 98-128, 図版79~90, 米子市教育委員会。

縄文時代前期からのヒョウタン, アブラナ類, アサ(?), カジノキ, シソの出土。縄文晩期以降のイネ, および水田雑草。

Kawamuro, K. & Torii, A. Past vegetation on volcanic ash forest soil I. Pollen analysis of the black soils, brown forest soils and podzolic soil in Hakkoda Mountain. Bull. For. & For. Prod. Res. Inst., No. 337: 69-89, pls. 1~4.

黒色土の成因を明らかにするため, 八甲田山高田大岳南麓緩斜面の花粉分析を行なう。褐色森林土とポドゾルでは過去4000年間森林であったが, 黒色土では疎林もしくは草原であった。土壌の花粉分析の有効性も検討している。

川崎市教育委員会市民ミュージアム準備事務局。川崎市内各遺跡に於ける花粉分析及び材・種子同定報告。「市民ミュージアム展示実測調査, 古代環境模型化調査報告書」, 20-73, 川崎市教育委員会市民ミュージアム準備事務局, 株式会社トータルメディア開発研究所。

ボーリング試料の花粉分析に基づく過去10000年間の植生史。遺跡出土の材・種実類。木材の記載と図版あり。

木村英明。弥生併行期の農耕—北海道。季刊考古学, No. 14: 53-56。

Koike, H. Prehistoric hunting pressure and palaeobiomass: an environmental reconstruction and archaeozoological analysis of a Jomon shellmound area. Prehistoric Hunter-gatherers in Japan —New Research Method. The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin, No. 27: 27-53. University of Tokyo Press.

村田川流域における縄文貝塚をとりまく植生史を紹介。

小嶋芳孝。石川県寺家遺跡。季刊考古学, No. 15: 79-80。

飛鳥時代以前から室町時代の砂丘移動による植生変遷を花粉分析によって明らかにした。

粉川昭平。長崎県北有馬町今福遺跡の種子類。「長崎県文化財調査報告書第84集。今福遺跡III」, 313-316。

弥生時代以降の大型植物遺体。中世からはチャンチンモドキが産出。

粉川昭平。新保遺跡出土種子類。「新保遺跡I, 弥生・古墳時代大溝編—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告第10集—」, 149-150, pls. 34~39. 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団。

弥生時代および古墳時代の大型植物遺体。

近藤鍊三。暁遺跡出土炭化材の樹種識別。「帯広市埋蔵文化財調査報告第5冊, 帯広・暁遺跡2」, 82-83. 帯

広市教育委員会。

縄文晩期の墓より検出された炭化材はイヌエンジュと思われる。三方向断面の走査型電子顕微鏡写真あり。

近藤錬三。空港南B遺跡出土炭化木片の樹種識別。「帯広市埋蔵文化財調査報告第2冊、空港南B遺跡」、57-58。帯広市教育委員会。

炭化材の形態記載。三方向断面の走査型電子顕微鏡写真あり。

近藤錬三。宮本遺跡の土壌および土器胎土の植物珪酸体分析。「帯広市埋蔵文化財調査報告第3冊、帯広・宮本遺跡」、148-158。帯広市教育委員会。

土壌断面の分析により4植物珪酸体帯を区分。

近藤錬三・佐瀬 隆。植物珪酸体、その特性と応用。第四紀研究, 25(4): 31-63。

植物珪酸体とその分析の基礎と応用を概説。文献がよく整理されている。基本形態を示す5枚の図版はすべてSEM像。

黒松康悦・粉川昭平。亀井遺跡出土の大型植物遺体。「亀井(その2)、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」、339-388。大阪府教育委員会・大阪文化財センター。

弥生時代前期中葉～7世紀代の植物遺体を統計的に扱う。粒度組成との関係について分析あり。

前田保夫・松島義章・松本英二・松田 功・居平昌士。約5千年前以降における根室半島ノツカマップ付近の自然環境の変遷。根室市博物館開設準備室紀要, No. 1: 3-22。

5000年前にはすでにコナラ属を中心とする広葉樹林が定着していた。

松田隆嗣。亀井(その2)遺跡出土木製遺物の用材について。「亀井(その2)、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」、399-415。大阪府教育委員会・大阪文化財センター。

農耕具が主で40点を報告。弥生時代における典型的な木材利用を見ることができるといふ。

松田隆嗣。脇浜遺跡出土木製遺物の用材について。「助大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第6輯都市計画道路貝塚中央線建設に伴う脇浜遺跡一発掘調査報告書」、116-118。財団法人大阪府埋蔵文化財協会。

大阪湾沿岸海浜部の遺跡出土の古墳時代の木製遺物15点の同定。

Matsushita, M. & Sanukida, S. Studies on the characteristic behavior of pollen grains and spores in Lake Hamana on the Pacific coast of central Japan. The Quaternary Research (Tokyo), 25(2): 71-79.

浜名湖底の表層堆積物22点の花粉・孢子組成を4つのタイプに分け、花粉の水中での挙動の違いを議論。

Matsutani, A. Identification of Italian millet from Esashika Site by means of scanning electron microscope. J. Anthropol. Soc. Nippon, 94(1): 111-118.

アワの穎の表面構造を、現生および岩手県江刺家遺跡(平安)産出炭化粒を用いて詳細に検討。

松谷暁子。原町西貝塚出土の炭化植物。「古河市史資料原始・古代編」、195-208。茨城県古河市。

縄文時代黒浜期の炭化材小片と炭化物小片(オニグルミ)。

松谷暁子。五庵I, II遺跡出土の炭化種子について。「五庵I遺跡発掘調査報告書。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書97」、436-437。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。

平安時代からのアワ、中世からのアワ、ヒエの炭化種子。

松谷暁子。豊富町豊富遺跡出土種子の灰像について。市立旭川郷土博物館研究報告, 16: 1-11。

天塩郡の擦文期遺跡出土炭化種実, キビ, ソバ, 豆類。

南木睦彦. 鍛冶谷・新田口遺跡出土の種実類. 「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集, 鍛冶谷・新田口遺跡」, 411-412, 図版17~19. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団.

埼玉県戸田市の古墳時代および近世からのモモ, センダンの産出。

南木睦彦. 第四紀大型植物化石研究の課題と問題点. 植生史研究, No. 1: 19-27.

大型植物化石の内容と産状による区分, 同定と標本の保存, 系統と進化, 絶滅・消滅と出現, 植物相・植生の復原などについて議論。

南木睦彦・能城修一・粉川昭平・小杉正人・鈴木三男. 植物遺体と古環境. 「伊木力遺跡」, 44-53. 長崎県多良見町教育委員会.

縄文時代前期. センダンの丸木舟, 最古のモモ, チャンチンモドキの産出。

光谷拓実・田中 琢. 古年輪学研究(1). 京大防災研年報, 29B-2: 95-108.

年輪年代法でヒノキを使って37B.C. までさかのぼったという報告。

宮地直道・鈴木 茂. 富士山東麓, 大沢藍沢湖成層のテフラ層序と花粉分析. 第四紀研究, 25(3): 225-233.

約2500年前に形成された御殿場泥流堆積物の凹地に成立した大沢藍沢湖成層の研究. 御殿場一帯は9世紀頃までスギ林, その後スギ林の破壊とタケニグサ属・キク科の増加, やや遅れてマツ属の増加が始まる。

宮下 治. 多摩丘陵北域における上総層群の花粉群集. 地質学雑誌, 92(7): 517-524.

上総層群の花粉群集は下位からメタセコイア群集(大矢部層), ツガ属群集(連光寺層中部), スギ科群集(連光寺層上部), アカガシ亜属群集(稲城層・飯室層), 針葉樹-ブナ属群集(高津層)である。

Miyoshi, N. & Yano, N. Late Pleistocene and Holocene vegetational history of the Ohnuma moor in the Chugoku mountains, western Japan. Rev. Palaeobot. Palynol., 46: 355-376.

中国山地の大沼湿原のポーリングサンプルによる過去2万年の植生史。

水野清秀・南木睦彦. 広島県西条盆地南部の第四系の層序. 地質調査所月報, 37: 183-200.

約70~50万年前. 大型植物化石のリストあり。

百原 新. 日下遺跡出土の植物遺体. 東大阪市文化財協会ニュース, Vol. 2 No. 1: 11-12.

縄文時代後期から晩期の貝塚などから産出した大型植物遺体. ムジナモ種子を含む。

百原 新・三田村宗樹・粉川昭平. 奈良県富雄川河床から産出した鮮新世イヌカラマツ化石. 奈良植物研究, 9: 21-27.

大阪層群中最も上位のイヌカラマツ化石の報告, およびそれに伴う他の植物化石。

森 浩一. 基層としての木の文化. 「日本の古代第4巻. 縄文・弥生の生活」(森 浩一編), 375-400. 中央公論社, 東京.

先史における木の利用と植物文化。

守田益宗・相沢俊二. 東北地方北部の亜高山帯の植生史に関する花粉分析的研究. 東北地理, 38: 24-31.

亜高山帯針葉樹林帯の形成・地域性を考察。

Morley, J.J., Heusser, L.E. & Sarro, T. Latest Peistocene and Holocene palaeoenvironment of Japan and its marginal sea. Palaeogeogr., Palaeoclimatol., Palaeoecol., 53: 349-358.

更新世末期から完新世の日本とその沿海の古環境。

- 中堀謙二。花粉群集地域変化図を基にした晩水期以降の植生変遷。種生物学研究, 10:14-27。
12000, 8000, 6000, 3000年前の日本各地の花粉群集を比較して, モミ・ツガ林の盛衰, 照葉樹林の発達, 表日本と裏日本の植生の違いについて考察する。
- 中西弘樹。対馬海流と漂着物。季刊考古学, No. 15:33-36。
熱帯起源の果実と種子の漂着・遺跡の中の漂着物などについて議論。
- 能城修一・鈴木三男。鍛冶谷・新田口遺跡出土木材の樹種。「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集, 鍛冶谷・新田口遺跡」, 398-410, 図版1~16。埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
埼玉県寿能泥炭層遺跡との比較が興味深い。
- 小木団体研究グループ。小佐渡山塊南部の新生界。地球科学, 40(6):417-436。
更新世後期の段丘堆積物からなる大谷層より産出する花粉化石と大型植物化石の表を含む。
- 小棕純一。洛中洛外図の時代における京都周辺林—「洛外図」の資料性の検討を中心にして。国立歴史民俗博物館研究報告第11集:81-105。
資料にもとづく都市周辺の植生景観の考察。
- 大塚 誠。小園遺跡住居趾出土の木材炭化物。「菅生台地と周辺の遺跡(XI)」, 186-203。大分県竹田市教育委員会。
123点を扱い, 当時の植生は落葉広葉樹が混交するモミ・ツガ林で現在よりも寒冷であったと推察している。
- パリオ・サーヴェイ株式会社(徳永重元・橋本真紀夫)。富山県南太閤山I遺跡試料花粉分析。「都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4)」, 41-46。富山県教育委員会。
- パリオ・サーヴェイ株式会社。自然科学的分析。「中村遺跡:関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-III)」, 538-596。渋川市教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団。
古墳から江戸時代のおもにテフラ直下遺構面についての花粉・大型植物遺体・木材遺体の検討結果。木材は多くが加工木で詳細な記載と写真図版が付されている。
- パリオ・サーヴェイ株式会社。鍛冶谷・新田口遺跡試料微化石分析。「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集, 鍛冶谷・新田口遺跡」, 413-440。埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
埼玉県戸田市の古墳時代および近世の遺跡の花粉, 珪藻, プラント・オパール分析。
- パリオ・サーヴェイ株式会社。花粉・珪藻分析報告。「亀井北(その3), 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」, 付1-17。大阪文化財センター。
河内平野の縄文から近世。環境は弥生・古墳時代において亀井・久宝寺・加美の三大遺跡の影響を大きく受ける。照葉樹林の発達について考察あり。
- パリオ・サーヴェイ株式会社。樹種・種子同定報告(抄)。「高崎市文化財調査報告書第71集(宿大類遺跡群VII)矢島町村西・増殿遺跡一県営宿大類地区圃場整備事業に伴う緊急発掘調査概報一」, 39。高崎市教育委員会。
中世の井戸から産出した木製品など(カラマツを含む)と大型植物遺体(ウメ・モモ)。
- パリオ・サーヴェイ株式会社。材・種子同定。「高崎市文化財調査報告書第77集(矢中遺跡群IX)下村北・砂内遺跡。昭和60年度矢中地区団体営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概報」, 40。高崎市教育委

員会。

中世の井戸から産出した木材と大型植物遺体。

パリオ・サーヴェイ株式会社。材同定。「茨城県教育財団文化財調査報告第35集。常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書9。小場遺跡」, 416。茨城県教育財団。

縄文時代後期の土壌から産出した木材1点, クリ。

パリオ・サーヴェイ株式会社。種子同定。「茨城県教育財団文化財調査報告第35集。常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書9。小場遺跡」, 417。茨城県教育財団。

縄文時代後期からの, コナラ属またはシイ属, クリ, オニグルミの炭化種子片。

パリオ・サーヴェイ株式会社。奥山A遺跡出土試料炭化材同定報告について。「茨城県教育財団文化財調査報告第31集。水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地区埋蔵文化財調査報告書2。奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」, 239-240, pl. 72。茨城県教育財団。

古墳時代前期の竪穴住居の炭化材1点。コナラ属コナラ節。

パリオ・サーヴェイ株式会社。西原遺跡出土試料種子及び材同定結果について。「茨城県教育財団文化財調査報告第31集。水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地区埋蔵文化財調査報告書2。奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」, 241-243, pls. 73~76。茨城県教育財団。

古墳時代後期前葉の炭化種子及び炭化材。

パリオ・サーヴェイ株式会社。柳坪遺跡坪遺跡8区土壌の花粉分析及びプラントオパール分析について。「山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集。柳坪遺跡。中央自動車道長坂インターチェンジ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, 160-164。山梨県教育委員会・日本道路公団。

平安時代の泥炭層の花粉分析及びプラント・オパール分析。水田雑草の種実, イネ型花粉, イネのプラントオパールを含む。

パリオ・サーヴェイ株式会社。柳坪遺跡出土試料同定報告。「山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集。柳坪遺跡。中央自動車道長坂インターチェンジ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, 165-167, 図版68~73。山梨県教育委員会・日本道路公団。

平安時代谷埋め堆積物から産出した加工材, ヒノキ属がかなり多い。

パリオ・サーヴェイ株式会社。向山遺跡出土炭化材の樹種同定。「いわき市埋蔵文化財調査報告第14冊。向山遺跡。弥生時代から平安時代の遺物包含層の調査」, 145-147。建設省磐城国道工事事務所・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団。

奈良~平安時代の炭化材, クリとモミ属。

パリオ・サーヴェイ株式会社。志村坂上遺跡試料材同定報告。「志村坂上遺跡第三次調査報告一見次幼稚園部分一」, 46, pls. 1~2。板橋区教育委員会。

古墳時代の住居址から産出した炭化材, コナラ属クヌギ節。

パリオ・サーヴェイ株式会社。中矢下遺跡出土試料材同定報告。「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第57集。中矢下・夕日ノ沢・上前原沢・芝口ヲネ・後山北谷・滝尾塚。住宅・都市整備公団飯能南台地区埋蔵文化財発掘調査報告書」, 172-174。埼玉県埋蔵文化財調査事業団。

9~10世紀の炭焼窯から産出した炭化材, コナラ属コナラ節が多く, アカガシ亜属, クリ, カキノキあ

り。

パリノ・サーヴェイ株式会社。上貝塚遺跡001住居跡の炭化材樹種同定。「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V—谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)—」, 386-388, pls. 97~100. 日本道路公団東京第一建設局・財団法人千葉県文化財センター。

古墳時代(鬼高期), 住居跡炭化材, コナラ属コナラ節とコナラ属クヌギ節。

パリノ・サーヴェイ株式会社。西沼田遺跡出土建築材同定・種子分析報告。「山形県埋蔵文化財調査報告書第101集。西沼田遺跡発掘調査報告書」, 91-105. 山形県・山形県教育委員会。

古墳時代住居跡から産出した材, コナラ属クヌギ節のほか多様な落葉広葉樹を含む。種実はイネ, アサ, 湿地性草本, 樹木を含む。

パリノ・サーヴェイ株式会社。分郷八崎遺跡試料, 材及び種子同定報告。「分郷八崎遺跡。関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書<本文編>」, 659-661. 群馬県北橋村教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団。

縄文時代黒浜期の住居跡から産出した炭化材(クリ)と炭化種子(ミズキ)。

嵯峨山 積・赤松守雄・五十嵐八枝子。北海道東部, 根釧原野の中・下部更新統。地球科学, 40(6): 373-382。

風蓮湖層・別寒辺牛川層・根釧層に区分しそれぞれの花粉組成を図示している。風蓮湖層はスギ属・トウヒ属・カバノキ属, 別寒辺牛川層はトウヒ属・モミ属・ツガ属・カラマツ属が優占, 根釧層はコナラ属・クルミ属などが比較的多い。

Sakaguchi, Y. Evidence of the introduction of burned-field cultivation into the Japanese Central Highlands during the Jomon Period. Bulletin of the Department of Geography, the University of Tokyo, No. 18: 21-28.

長野県北部の唐花見湿原における花粉化石群集の急変から, 高地における約3000年前以降の焼畑農耕が示された。

阪口 豊。唐花見泥炭地のボーリングと花粉分析の予察的研究。「最終氷期以降の自然環境の変動。昭和58・59年度東京大学特定研究経費成果報告書」, 29-34. 東京大学理学部。

Sakaguchi, Y. & Okumura, K. Interglacial climates and relic red soils in northern Japan based on pollen records of interglacial deposits in eastern Hokkaido. Bulletin of the Department of Geography, the University of Tokyo, No. 18: 29-48.

サロマ湖南岸近くの最終間氷期泥炭・シルト層の花粉化石群集は, やや温暖から冷涼の気候を示す。

Sanukida, S. & Matsushita, M. Studies on the modern sedimentary environment in Lake Hamana on the Pacific coast of central Japan. The Quaternary Research (Tokyo), 25(1): 1-12.

浜名湖底の表層堆積物中の花粉・胞子の分布などから, その供給源について議論。

佐々木昌子。植生の異なる地域に発達する湿原の表層堆積物の花粉組成の比較。第四紀研究, 25(1): 13-19。

7調査地での表層花粉と供給源との関係から各花粉の散布範囲や出現様式を考察。

佐々木高明。縄文文化と日本人—日本基層文化の形成と継承。267 pp. + vii, 小学館, 東京。

植物と人間の交渉に触れる。

佐瀬 隆。馬場壇 A 遺跡・座散乱木遺跡に分布するテフラのプラントオパール分析。「東北歴史資料館資料

集16：馬場壇 A 遺跡 I」, 123-130. 東北歴史資料館。

約1万年前の、タケ亜科（ササ属）優占からタケ亜科（ササ属・マダケ属）と非タケ亜科（キビ亜科が主）が混在するイネ科植生への変化が示された。

佐藤敏也。久保泉丸山遺跡出土土器上の靱痕。「佐賀県文化財調査報告書、久保泉丸山遺跡、附篇」, 516-519, pl. 211. 佐賀県教育委員会。

縄文晩期併行期の靱痕計測値。

佐藤敏也。湯舟沢遺跡出土弥生土器の靱痕。「滝沢村文化財調査報告書第2集、湯舟沢遺跡」, 809-817. 岩手県滝沢村教育委員会。

弥生IV式土器の靱痕計測値。

佐藤敏也。向山遺跡出土土器中の炭化稲粃。「いわき市埋蔵文化財調査報告第14冊、向山遺跡、附篇」, 130, fig. 1. 財団法人いわき市教育文化事業団。

弥生III式土器、靱痕の計測値。

佐藤敏也。新保遺跡の出土米粒、その他。「新保遺跡 I、弥生・古墳時代大溝編一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集一」, 95-107, pls. 20~22. 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団。

弥生時代から古墳時代の炭化米粒多数の計測。

佐藤敏也。万丁目遺跡出土穀類。「万丁目遺跡発掘調査報告書」, 48-59. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。

平安～中世。長粒の炭化米が含まれる。

佐藤敏也。五庵 I - II 遺跡の穀類。「五庵 I 遺跡発掘調査報告書」, 425-435. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。

平安～中世。コメ、オオムギ、マメ、ヒエ、アワの炭化種子。

佐藤敏也。古館 II 遺跡出土炭化穀類。「古館 II 遺跡発掘調査報告書」, 301-336. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。

中世、コメ（長粒が含まれる）、オオムギ、コムギ、アズキ。

嶋倉巳三郎。上牡丹森遺跡出土の炭化木。「大鰐あじら公園整備事業に伴う遺跡の発掘調査、大鰐町文化財調査報告第一集」, 111-148. 青森県大鰐町教育委員会。

住居趾覆土・住居趾炉内・住居趾床面から出土した炭化木を反射顕微鏡で観察。材の構造の記述と写真図版あり。

嶋倉巳三郎。根古屋遺跡の炭化木。「福島県霊山町根古屋における再葬墓群」(霊山根古屋遺跡調査団編), 124-125, 写真1. 霊山根古屋遺跡調査団。

試料はコナラ1点、クリ2点。

総合科学株式会社。脇浜遺跡をとりまく環境の古生態学的検討。「財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第6輯都市計画道路貝塚中央線建設に伴う脇浜遺跡一発掘調査報告書一」, 107-112. 財団法人大阪府埋蔵文化財協会。

大阪湾沿岸海浜部と遺跡での縄文時代晩期から中世（15世紀）の堆積物の花粉分析と珪藻分析。

Sohma, K. Recent progress of palynology in Japan, with special reference to the Middle and Early Pleistocene. "Recent Progress of Natural Sciences in Japan, vol. 11, Quaternary Research", 61-70. Science Council of Japan.

日本の前・中期更新世の花粉学的研究を概説。

相馬寛吉. スギとアケボノスギの花粉形態—その研究の歴史—. 植生史研究, No. 1: 45-54.

スギとアケボノスギの花粉形態・花粉化石の同定に関わる論議にふれている文献のリスト。文献にコメント付き。

杉山雄一・佃 栄吉・徳永重元. 京都府丹後半島地域の更新世後期から完新世の堆積物とその花粉分析. 地質調査所月報, 37: 571-600.

約40000年前以降, 5つの花粉帯 (TAG-I~V) を設定し, 植生の変遷と対比を試みる。

鈴木敬治. 安沢大露頭の泥炭層から採取した大型植物遺体と花粉分析 (2)安沢大露頭の泥炭層から出土した大型植物化石. 「東北歴史資料館資料集16:馬場壇 A 遺跡 I」, 147-148. 東北歴史資料館.

絶滅種と考えられるトウヒ属ほか数種産出。

鈴木三男・能城修一. 新保遺跡出土加工木の樹種. 「新保遺跡 I, 弥生・古墳時代大溝編, 一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集一」, 71-94, pls. 3~19. 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団.

水田遺構内の流路(溝)から出土した加工木1028点を報告. 各樹種ごとに, 同定の根拠, その樹種の分布, 材利用の特徴, 他遺跡からの出土状況の比較が示されている。

高田将志. 三国山脈主稜線周辺の化石周水河性平滑斜面・化石雪食凹地. 地理学評論, 59 (Ser. A) (12): 729-749.

周水河現象の発現頻度がハイマツ限界以高で顕著に増加する事を根拠に, 過去の周水河地形の分布からハイマツ帯の分布に言及している。

高原 光・竹岡政治. 近畿地方におけるスギの変遷(要旨). 植生史研究, No. 1: 55-61.

花粉分析結果からみた最終氷期以降のスギの変遷。

高原 光・竹岡政治. 京都市八丁平湿原周辺における最終氷期最盛期以降の植生変遷. 日生態会誌, 36(2): 105-116.

湿原内3地点のボーリングサンプルの花粉分析。

高橋伸幸・五十嵐八枝子. 北海道中央高地, 大雪山における高地湿原の起源とその植生変遷(II). 第四紀研究, 25(2): 113-128.

大雪山南西部のユートムラウシ湿原と中央部の凡忠別岳東方湿原について地形と植生の変遷を議論. 現植生と表層試料の花粉組成との関連性にも言及。

竹内貞子. 仙台上町段丘堆積物上部の¹⁴C年代—日本の第四紀層の¹⁴C年代(159)—. 地球科学, 40(4): 301-302.

31950±3000 yBPの年代が得られた泥炭質シルトの花粉組成は亜寒帯樹種が主。

竹内貞子. 仙台付近の低位段丘堆積物の花粉分析. 「北村信教授記念地質学論文集」, 517-525. 和文要旨(ページ番号なし).

比較的温暖な約4万年前と、比較的寒冷な約3万年前の花粉組成を示す。

竹内貞子。安沢大露頭の泥炭層から採取した大型植物遺体と花粉分析 (3)安沢泥炭層の花粉分析。「東北歴史資料館資料集16:馬場壇A遺跡I」, 149-150。東北歴史資料館。

マツ属・トウヒ属の優占。

寺沢 薫。畑作物。季刊考古学, No. 14: 23-31。

縄文・弥生時代の穀物および畑作物資料を総括。

辻 誠一郎。センダンの花粉形態と後期更新世吉沢層より産したセンダン属花粉化石の再検討。植物地理・分類研究, 34(2): 87-94。

検討したセンダン属花粉化石は形態からセンダンと同定できる。センダン属現生・化石花粉の記載。処理法の違いによる粒径の変化についても議論。

辻 誠一郎。日本の第四紀植生史研究の諸問題。植生史研究, No. 1: 3-18。

標本, 地質層序と年代, 植物遺体群集の性格の問題について議論。

辻 誠一郎。袋西浦遺跡の中世土壌内堆積物の花粉学。「袋西浦一東京都北区袋西浦遺跡発掘調査報告」, 179-186。赤羽北二丁目第2団地遺跡調査会。

中世においてマツ二次林はもとより森林がほとんどなく、荒地の植生が成立していた。

辻 誠一郎。火山噴火と古代の自然。週刊朝日百科「日本の歴史」, No. 35: 56-57。

約23000年前, 始良 Tn 火山灰の降灰は植生を含め生態系に大きな影響を与えた。

辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人。館林の池沼群と環境の変遷史。110 pp, 図版 I ~ XXXV。館林市教育委員会。

約2300年前頃からの池沼および周辺環境の変遷を、堆積物, 花粉化石, 珪藻遺骸化石, 大型植物化石の検討により解明。関東地方における3回の人間の植生干渉を設定。

辻 誠一郎・南木睦彦・鈴木三男・能城修一・千野裕道。多摩ニュータウン No. 796遺跡; 縄文時代泥炭層の層序と植物遺体群集。「東京都埋蔵文化財センター調査報告第7集」, 72-116, 図版35~64。東京都埋蔵文化財センター。

縄文時代中期の花粉, 大型植物遺体, 木材遺体を記載し, これらを総合して植物群, 植生を復原。

Tsukada, M. Vegetation in prehistoric Japan: the last 20,000 years. "Windows of the Japanese Past: Studies in Archeology and Prehistory" (ed. Pearson, R.J.), 11-56. The Center for Japanese Studies, Univ. of Michigan, Ann. Arbor.

過去2万年間の日本列島の植生史: 花粉帯と森林植生の時空間分布論。

Tsukada, M. Altitudinal and latitudinal migration of *Cryptomeria japonica* for the Past 20,000 years in Japan. Quaternary Research, 26: 135-152.

現生のスギの生態と過去2万年前の日本列島における分布と拡大を論じる。

塚田松雄。関東地方における第四紀後期の植生史。「日本植生誌VII関東」(宮脇 昭編), 78-103。至文堂, 東京。

最終間氷期以降の花粉帯の新設定と再定義。日本列島における過去2万年間の主要樹種の分布拡大を含む。

Tsukada, M., Sugita, S. & Tsukada, Y. Oldest primitive agriculture and vegetational environments in Japan. *Nature*, 322: 632-634.

宇生賀湿原における縄文早期のソバ栽培をもつ初期農耕活動の証拠。

渡部明夫。縄文時代後期の生業跡—香川県永井遺跡。季刊考古学, No. 17: 85-86, 81-82 (図版)。

ドングリが圧倒し、トチ・クリがこれに次ぐ、多量の堅果類出土。

渡辺 誠。堅果類。季刊考古学, No. 14: 32-35。

弥生時代以降の堅果類食の推移と民俗例。

渡辺 誠。久保泉丸山遺跡出土の植物遺体。「久保泉丸山遺跡, 附篇」, 520-524, 212。佐賀県教育委員会。佐賀市の縄文時代晩期中頃の遺跡からのドングリ類, リョクトウ (笠原氏同定) の産出。

渡辺 誠。植物遺体。「前谷遺跡, 松山町教育委員会文化財調査報告書」, 1-6。鹿児島県曾於郡松山町教育委員会。

縄文時代前期から産出した、イチイガシ他のコナラ属炭化子葉。

山田悟郎。北海道における先史時代の植物性食料について。北海道考古学, No. 22: 87-106。

野生と栽培植物遺体に分けて産地・種を総括し、縄文時代以降の植物性食料について考察。

山田悟郎。Tピット12掘削された頃の植生について。「帯広市埋蔵文化財調査報告第3冊, 帯広・宮本遺跡」, 143-147。帯広市教育委員会。

山口誠治。大型植物遺体より推定した局地的な環境の変化について。「亀井(その2), 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」, 389-398。大阪府教育委員会・大阪文化財センター。

弥生時代中期～後期および6世紀の大型遺体および材。

山口誠治。城山遺跡出土植物遺体について。「城山(その1), 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」, 190-193。大阪文化財センター。

弥生時代から10世紀にかけての大型植物遺体。

Yamanaka, M. Palynological studies of Quaternary sediments in Northeast Japan V. Mizusawayachi in the Shonai plain. *The Memoirs of the Faculty of Science of Kochi University, ser. D (Biology)*, 7: 77-85.

庄内平野の花粉分析。東北地方の他の研究との類似性から検討試料の年代を3000年前以降と判断。ブナ林の優占、イネの栽培について述べる。

山中三男。高知県南国市田村遺跡群の沖積世後期堆積物の花粉分析的研究。「田村遺跡群, 高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3分冊」, 493-512。

縄文時代後期以降のイネとソバの栽培について。

山野井 徹。山形盆地の形成とその自然環境の変遷。「東北地方における盆地の自然環境論的研究, 昭和58・59・60年度山形大学特定研究経費成果報告書」, 47-86。山形大学。

村山市浮沼の中期更新世以降の連続ボーリングコアの花粉組成を記載。とくに最終氷期の古植生と気候を推定。

安田喜憲。城山遺跡の泥土の花粉分析。「城山(その3), 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」, 107-138。大阪文化財センター。

河内平野一帯の最終氷期、弥生から近世の古環境を復原。

安田喜憲。縄文時代の比較文明環境論。縄文農耕の世界史的な位置づけをめぐって。比較文明, 2: 104-118。

地中海沿岸の草原の農耕と日本の森林帯の農耕の比較文明環境論。いずれも社会的ゆきづまりからくる危機的状況の中で導入されたと説く。

安田喜憲。気候と植生の変遷。季刊考古学, No. 15: 25-28。

3.5万年前以降の日本海側の気候と植生の変遷を示し、文化の発展と結びつける。

安田喜憲・山田 治。亀山遺跡の古環境復元。「亀山遺跡—第5・6次発掘調査概報—」, 37-40, 図1, 表1, 写真1~3。広島県立埋蔵文化財調査センター。

16000~13000 yBPの放射性炭素年代が出ている泥炭(ポーリングサンプル)の花粉組成は五葉マツ亜属が最優占, トウヒ属・モミ属・ツガ属が多産する。

安田喜憲・笠原安夫・山田 治。大宮遺跡の古環境復元調査。「広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第51集, 大宮遺跡発掘調査報告書兼代地区II」, 56-60, pls. 19~21, 広島県埋蔵文化財調査センター。

縄文時代晩期から弥生時代頃までの花粉分析。大型植物遺体もすこし扱っている。

依田清胤・鈴木三男。能登半島真脇より出土した自然木の樹種。金沢大学日本海域研究所報告, No. 18: 43-68。

縄文前期の真脇遺跡から出土した自然木344点を調べ当時の植生を復原している。アスナロについては材の検討・能登半島での分布の歴史についての示唆あり。ツルアジサイの報告もある。

吉井亮一。富山県小杉流通業務団地内遺跡群 No. 19遺跡谷部出土の種実遺体。「富山県小杉流通業務団地内遺跡群第8次緊急発掘調査概要 No. 18遺跡B地区・No. 19遺跡」, 43-46, 図版23。富山県教育委員会。

旧石器時代から縄文時代晩期の考古遺物包含層から出土したトチノキ・オニグルミ・コナラ属を主とする大型植物遺体の報告。

吉井亮一。富山県南太閤山I遺跡出土の種実遺体(2)。「都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4)」, 53-60。富山県教育委員会。

縄文時代前期の大型植物遺体。破損状況の記載があり、オニグルミについては特に詳しい。

1985年補遺

Heusser, L.E. & Morley, J.J. Pollen and radiolaria records from deep-sea core RC14-103: climatic reconstructions of Northeast Japan and Northwest Pacific for the last 90,000 years. Quaternary Research, 24: 60-72.

現生の花粉・放散虫の海底での分布から過去90,000年間の植物相と動物相の変遷を明らかにし、気温と降水量の変動を考察。

近藤錬三。居辺16遺跡土壌の植物珪酸体分析。「上土幌文化財発掘調査報告書, 居辺遺跡」, 70-77。上土幌町教育委員会。

縄文時代と先土器時代の植物珪酸体組成の違いを示す。写真と記載あり。

近藤錬三。広郷8遺跡の土壌の植物珪酸体分析。「広郷8遺跡」, 130-135, 187-189。北見市。

植物珪酸体の形態の記載と写真あり。

近藤錬三。居辺14遺跡土壌の植物珪酸体分析。「居辺14遺跡」, 254-261。上土幌町教育委員会。

植物珪酸体の形態の記載と写真あり。

近藤錬三・佐藤孝則。暁遺跡採取土壌の植物珪酸体分析。「帯広市埋蔵文化財調査報告1, 帯広暁遺跡」, 121-132。帯広百年記念館友の会。

植物珪酸体の形態の記載と写真あり。5つの植物珪酸体帯が区分された。

松田隆嗣。野田・藤並地区遺跡出土木製遺物の用木について。「野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書, 海南湯浅道路建設に伴う関連遺跡発掘調査」, 314-320。和歌山県教育委員会。

弥生から14世紀前半の木製遺物の樹種同定。平安中期の流木の同定もあり。

中堀謙二。北白川追分町遺跡の花粉分析。「京都大学埋蔵文化財調査報告III」, 95-111, 図版19~21。京都大学埋蔵文化財センター。

遺跡内数地点での花粉組成の変遷。

中堀謙二。北白川追分町遺跡の古植生の復原。「京都大学埋蔵文化財調査報告III」, 193-200。京都大学埋蔵文化財センター。

縄文中期末~後期の古植生を特に扇状地植生とトチノキに重点をおいて議論する。

西田正規。種子一縄文人は植物を栽培し農園をもっていたのか。歴史読本, Vol. 30, No. 19: 82-89。

鳥浜貝塚を例に, 植物採集・栽培を論じる。

パリオ・サーヴェイ株式会社。植物珪酸体(プラントオパール)分析報告。「野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書, 海南湯浅道路建設に伴う関連遺跡発掘調査」, 321-336。和歌山県教育委員会。

吉備平野の先土器時代から古墳時代前期の花粉分析を大阪平野と比較する。プラントオパール分析は2試料。

パリオ・サーヴェイ株式会社。見立遺跡資料, 鉱物分析・材同定及び¹⁴C年代測定報告。「見立溜井遺跡, 見立大久保遺跡-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書-KC. V, <写真図版編>」, 6p(ページ番号無し, 図版2-1~2-6を含む)。赤城村教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団。

BP(板鼻褐色軽石層)とATの間から産出した炭化材, トウヒ属近似種とヒノキ属近似種。

嶋倉巳三郎。穂積・高町遺跡出土の炭化木について。「穂積・高町遺跡」, 28-29。兵庫県加東郡教育委員会。

竪穴住居跡より出土した炭化木5点。クリとコナラ。写真・産出状態の図あり。

嶋倉巳三郎。穂積・西野々遺跡出土の炭化木について。「穂積・高町遺跡」, 30-33。兵庫県加東郡教育委員会。

火葬址遺構から出土した炭化木41点を同定。写真あり。

山田悟郎。勝山城跡の古環境について。「史跡上之国勝山館跡VII-昭和59年発掘調査整備事業概報」, 133-139, 260-261。上ノ国町教育委員会。

植生史研究第1号正誤表

箇所	誤	正
1ページ12行目	ふん意気	雰囲気
1ページ20行目	機関紙	機関誌
19ページ3行目	Probre <u>m</u>	Proble <u>m</u>
26ページ1行目	Quat <u>er</u> ary	Quatern <u>ar</u> y
26ページ5行目	岩内 <u>朋</u> 子	岩内 <u>明</u> 子
27ページ3行目	Pollen et <u>S</u> pore	Pollen et <u>S</u> pores
27ページ10行目	第35 <u>会</u>	第35 <u>回</u>
32ページ9行目	FRAN <u>C</u> E	FRANC <u>E</u>
32ページ23行目	FLORIN <u>2</u>	FLORIN ₂ (コンマを削除)
40ページ18行目	196pp.	(削除)
45ページ3行目	D. DON <u>2</u>	D. DON ₂ (ピリオドを削除)
48ページ22行目	Stratigraph <u>cal</u>	Stratigraph <u>ical</u>
56ページ表1番号2の文献	竹岡・ <u>斎</u> 藤	竹岡・ <u>齋</u> 藤
58ページ10行目	冷温帯 <u>落</u> 広葉樹林	冷温帯 <u>落</u> 葉広葉樹林
61ページ8行目	<u>斎</u> 藤秀樹	<u>齋</u> 藤秀樹
62ページ28行目	(山崎, 1943; 1951)	(山崎, 1943 a; 1954)
62ページ33行目	Grana Palynol <u>ig</u> ica	Grana Palynol <u>og</u> ica
63ページ5行目	植物硅酸体分析	植物珪酸体分析
64ページ1行目	<u>斎</u> 藤秀樹	<u>齋</u> 藤秀樹

植生史研究第2号正誤表

箇所	誤	正
38ページ11行目	P. B <u>A</u> SS	P. BA <u>A</u> SS
38ページ27行目	P. B <u>A</u> SS	P. BA <u>A</u> SS
38ページ33行目	Dr. B.J.H. <u>ter</u> WELL	Dr. B.J.H. <u>TER</u> WELL
39ページ2行目	Dr. B.J.H. <u>ter</u> WELL	Dr. B.J.H. <u>TER</u> WELL
68ページ4行目	市川 <u>三</u> 次	市河 <u>三</u> 次

<編集後記>

【植生史研究】も第3号となり、編集にも少しなれて、スタイルもある程度落ちついてきたようです。第2号とおなじようにシンポジウムの記録と文献リストを雑誌の後半に載せました。文献は去年より2割ほど増えていて、植生史研究のひろがりを感じました。このひろがりに負けないように、そして植生史研究がより深まっていくように、【植生史研究】ももっともっと内容豊かな雑誌にしていかなければと思っています。

(大井信夫)